
❖ 講演会・研究セミナー ❖

IBS-Ryukoku 現代真宗研究国際プロジェクト

真宗と社会実践
—社会を変える/社会が変わる—

2021 年 12 月 23 日(木) 13:30～15:00

龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室/オンライン開催 (Zoom)



会場の様子

❖ 概 要 ❖

2021 年 12 月 23 日、龍谷大学世界仏教文化研究センター、米国仏教大学院共催の IBS-Ryukoku セミナーが開催された。本セミナーは同センターが米国カリフォルニア州バークリーの米国仏教大学院（IBS）と協同し、米国における仏教伝道者の活動について発信する場として設けられた。今年度は全二回のセミナーを予定しており、第一回目となる今回のセミナーでは桑原浄信氏（浄土真宗インターナショナルオフィス事務局長）より「真宗と社会実践—社会を変える／社会が変わる—」という題目の下、米国における仏教伝道の現状と課題についての報告が行われた。

講 演 者：桑原 浄信 氏（浄土真宗インターナショナルオフィス 事務局長）



桑原 氏

桑原氏はまず、カリフォルニア州における仏教伝道の拠点となっている複数の仏教会（北米開教区バークレー仏教会、北米開教区マリン仏教会）とオフィス（浄土真宗インターナショナルオフィス）の概要と活動内容を紹介した。具体的にはこれらの組織が発行しているパンフレットや、ホワイトハウスで執り行われたイベントの様子が示された。

こうした活動を紹介する一方で、氏は昨年米国で大きな盛り上がりを見せた「Black Lives Matter」運動に触れ、この運動に対する仏教会の方針を決める際には文化的な認識のずれか

ら生じるいくつかの議論があったことを紹介した。例えば、仏教会がこの運動に関して声明を出すとなったとき、キーフレーズとして上記の「Black Lives Matter（黒人の命も大切だ）」ではなく「All Lives Matter（皆の命が大切だ）」を用いることを提案したものの、現地のメンバーより、この語は黒人の権利運動の相対化を意図したものとして受け取られかねないという指摘を受け、先の提案を撤回したことがあったという。

さらに氏は、米国でしばしば盛り上がりを見せるこうした社会変革活動の根底には、「変化させられるべき社会／社会を変化させる私」という社会的認識があるのではないかと指摘した。他方で氏は、真宗には例えば『歎異抄』において「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり」とあるように煩惱熾盛の思想があることを紹介した。氏は、そうした真宗の人間観は社会を変えることにに対する無力感、虚無主義に繋がりがかねないものであることも踏まえたうえで、いかに社会変革の意識と真宗の教えの間のバランスをとっていくかという問いに向き合うことこそが、仏教伝道の間では肝要であると述べた。

また、氏は子を失ったキサ・ゴータミと釈尊のエピソードを取り上げ、我が子を失った母の苦しみを和らげたのは、単に死の必然性を教える類の知識ではなく、釈尊が「誰も死者を出したことの無い家庭」なるものを説くことによって伝えた智慧の教えであったと述べた。氏は、異国における文化的な相違に起因する仏教伝道の難しさを熟知しつつも、そうした仏教における智慧の教えを通じてであれば、人々の行動につながる根本的な内面変革を促すことも、可能であるかもしれないと語った。

質疑応答では、超越的なものを志向する宗教と社会的に共有されうる倫理の相違に関連する仏教伝道の難しさを踏まえた上で、どうすれば説得的な伝道が可能となるのかといった質問や、キリスト教の影響が強い文化圏における仏教伝道の実態はどうなのかといった質問が来場者より寄せられた。